

『雨月物語』における中国白話小説の受容
— 「菊花の約」を中心に —

姜 華

Impact of Novels in the Vernacular Chinese on “Ugetsu Monogatari”
— with “Kikukuwa no Chigiri” as Focus —

Hua Jiang

『雨月物語』における中国白話小説の受容 — 「菊花の約」を中心に —

姜 華*

Impact of Novels in the Vernacular Chinese
on “Ugetsu Monogatari”

— with “Kikukuwa no Chigiri” as Focus —

Hua Jiang *

Received December 4, 2017

Abstract

This thesis investigates the “Kikukuwa no Chigiri” of the “Ugetsu Monogatari” from the aspects of comparisons and researches. Mainly from the theme of “Faith”, and the structure of the novel, assimilate the rhetorical device and so on. It has further explicitly analyzed “Kikukuwa no Chigiri” has profound influenced on the sixteenth chapter “Fan juqing jishu sisheng jiao” of the novel “Yushimingyan”—Chinese vernacular novel.

“Kikukuwa no Chigiri” imitates Chinese book “Fan juqing jishu sisheng jiao”. It’s on the background of the warring states period. And it’s the excellent adepted works about satirizing the warriors,. According to the comparison we can see that Ueda Akinari didn’t completely absorb “Fan juqing jishu sisheng jiao”, but submitted to the customs and the characteristics of the time in Japan. It’s not a simple imitation, but a unique literary style.

1. はじめに

上田秋成の『雨月物語』は近世文学において傑出している作品だと言えるであろう。『雨月物語』は日本文学史を通じて、優れた怪異小説として著名であるが、一方、典雅、浪漫的な詩美を併せ持ち、近世文学の雄編として、古来愛読者が絶えなかったことはいままでもない。その中の「菊花の約」が中国白話小説から翻訳されたと言われているが、その和漢典拠について、後藤丹治の精細に調査された「雨月物語出典細目表」¹を見ると、『古今小説』（『喻世明言』）の「范巨卿鶏黍死生交」（以下「死生交」と略称）、『今古奇観』または『警世通言』の「俞伯牙摔琴謝知音」、『英草子』巻二第三話「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」などが列挙されている。しかし、高田衛の「雨月の世界」の図表に纏められた主たる典拠には『古今小説』巻十六の「死生交」しか載っていない。そのいずれも共通するので、「菊花の約」の主な典拠が確実に「死生交」であると思えるわけである。「死生交」と「菊花の約」にだけあって、あとの諸

*国際交流センター（大連外国語大学交流教員）International Exchange Center

作品には全くない表現や用語がいかにも多いかということにすぐ気づくであろう」、また、「その翻案態度は、全体の構想においても、部分の材料とその配列においても、発想の手順においても、また言葉と文字の用い方においても、原典を惜しみなく吸収し、文字どおり『翻案文学』と呼ぶにふさわしいものであった」²と鶴月洋が明らかに論じられている。本論はここで両作品の主題構想、人物の設定、詞章撰取などを基準に考え、『雨月物語』の「菊花の約」における中国白話小説『三言』（明・馮夢龍・『喻世明言』『醒世恒言』『警世通言』）の「死生交」からの影響を検討してみようと思う。

2. 「信義」という主題

両作品は「信義」をめぐる物語を展開していくことは、共通の特徴である。構想上、簡素化、緊密化して集中的に主題を強調すると共に、言葉を巧みに表現されたのも効果的である。まず、両作品の起筆と結句の部分进行分析してみよう。「菊花の約」の冒頭は以下のように、

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐めや。軽薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども、軽薄の人は絶て訪ふ日なし。

となり、また結句の部分は「咨、軽薄の人と交りは結ぶべからずとなん」と書かれている。「全く書き出しがすばらしいのだよ」「それに結末のところをやつぱりもう一度、「咨、軽薄の人と交は結ぶべからずとなむ」と切ったのもいい」³と谷崎潤一郎が、「菊花の約」の好きな理由を表明したのである。同じく、佐藤春夫も「あれの書き出しと結びとが同じやうに出来ているのが、つまり起筆と結句でもう一度繰り返してであるのがひどく好きだ」⁴という同感だったのである。しかし、美文だと認められている冒頭と結語は、典拠の「死生交」に基づいて書き改められたものである。「死生交」の冒頭は、

种树莫种垂杨枝，结交莫结轻薄儿。杨枝不耐秋风吹，轻薄易结还易离。

君不见昨日书来两相忆，今日相逢不相识？不如杨枝犹可久，一度春风一回首。

となっている。また結句のところは、

千里途遥，隔年期远，片言相许心无变，宁将信义托游魂，堂中鸡黍空劳动。

月暗灯昏，泪痕如线，死生虽隔情何限。灵輶若候故人来，黄泉一笑重相见。

となっている。見れば分かるように、「菊花の約」は「死生交」の表現手法を借用したものである。信義を中心とする両作品の同じ意味の起筆は、全体の内容において、物語が始まる前のナレーションのようなもの（5）であろう。内容上は軽薄な人間との交際に対する戒めである。秋成は原文をうまく翻訳したが、秋成の文章のほうが原文よりはるかに秀でていとは言えないであろう。秋成は文末を「咨、軽薄の人と交はりは結ぶべからずとなん」と留めた。いうまでもなく、本編はじめの「结交行」翻訳の名文と呼応する。それにしても「軽薄の人」との交際のいましめをはじめに書きながら、内容は信義の人の物語であった。その小説的アイロニーについては、多くの人が話題にしている所である。「菊花の約」は中国白話小説を翻案したものであるが、結末の部分は原話との違いが改めて問題になるであろう。張劭は范式の葬儀にはせまじ、自刃した。「骨を蔵め」に行ったはずの左門は、赤穴丹治を斬った。軽薄の人（丹治）は死し、信義の人は、跡をくらましたのである。左門のその後を書かぬ所に作者の思いがあるように思われる。

3. 事件の構造

「死生交」の張劭と范式という人物は、『後漢書』卷七十一の「范式伝」にあり、中国人には史上著名な人物であり、信義の人として、よく知られていたという。秋成は、これを儒者丈部左門と武士赤穴宗右衛門とした。播磨の国の加古の宿駅に、丈部左門という学者がいたが、この学者は、貧しくとも、精神的にわずらいのない生活を理想としており、友とする書物のほかは、家庭の諸道具も簡略を愛していた。その母も、孟子の母に劣らず立派で、母子ともども「口腹」(日常生活)の為に人を煩わすというようなことの絶対のない人々であった。

この左門が、出雲の国松江の豪族、赤穴宗右衛門が「面は黄に、肌黒く瘦せ、古き衾のうへに悶へ」て、「痛楚声いともあはれ」に病み臥しているのを見て、手厚く看病する。これが機縁となって、相交るようになり「日夜交りて物がたりするに、赤穴も諸子百家のことおろおろ語り出でて、問ひわきまふる心愚ならず。兵機のことわりは聞えければ、ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす」に至る。

その赤穴が、出雲の動静を見ようとする最初の意志に従い、しばらく左門とあいわかれることになった。そこで左門と赤穴の間に、重陽の日に再会するという約束ごとがかかわされ、互に情をつくし、赤穴は出雲へと帰っていったのだった。

やがて、赤穴は、不思議な現れ方をして約束を守るために帰ってくる。約束を守るために、赤穴は「人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」と信じて、刃の上に伏し、自分の肉体を殺すことによって、魂の真実と自由を守りぬいたのだった。赤穴の幽霊は、泪だらけの表情となりながら「今は永き別れなり。只母公によくつかへ給へ」といい残し、たちまちのうちに消え失せてしまう。それを左門がひきとめようとする、陰風に眼がくらんでしまう。

左門は、赤穴の骨を蔵めるために出雲へ出かけ、<菊花の約>を守りぬいた赤穴のために、丹治を一刀のもとに抜打ちに斬り捨てて恨みを晴らす。

「死生交」では、張劭は読書を志し、三十五歳であっても嫁を娶っていないという人である。范式は商人であっても、学問を志し、科挙の試験を受けようとする人間である。二人とも選挙に応じようとする途中で出会った。張劭は范式の危ないところを救い、熱病に倒れた范式の面倒を手厚く見てくれた。范式は命をかけるほどの看護の手を差し伸べてくれた張劭の行為に感動し、義兄弟の契りを結んだ。その范式が、家族のことを心配して故郷へ帰ろうとするので、しばらく張劭とあいわかれることになった。二人の別れの日は重陽の佳節であり、再会の期日は一年後の重陽の日に定められた。これに対して、左門は宗右衛門との別れる日に、再会の約束を求め、兄の宗右衛門に期日の確認を懇願し、重陽の日に定められたのである。両作品の期日の取り方が違っていても、再会の日を重陽に決められたのは同じであるという点に重みがある。

また、約束の日が来て、宗右衛門と范式は各自の事情で再会に行くことができなかった。再会の約束を守るために、二人とも「人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」と信じて、自刃して魂になって陰風に乗って菊花の約に赴いたのである。この構造において両作品は驚くほど同じであった。「菊花の約」はまったく「死生交」に基づいて翻案したことが分かる。

4. 詞章摂取

「菊花の約」は主題、物語の構造だけではなく、文章の中で数多くの言葉あるいは描写は「死生交」の影響を受けたのである。

①「兄弟の盟」とは、義兄弟の約を結ぶことであるが、このくだりは原話「死生交」に多くを借りていた。中国での「義兄弟」は、人間の運命的な出逢いと、その精神的な共同を前提に

して、義兄弟の約束が、相互の自由意志によって結ばれる。日本の当時の習俗からいえば、形の上ではむしろ衆道の結合に似ている。秋成はもちろん、そういう日本的習俗を意識して、原話の「兄弟」の約を取り入れたのである。本編の題名「菊花の約」がそれを暗示している。

②「菊花の約」には

あら玉の月日はやく経ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶ひやかに、九月にもなりぬ。九月はいつもよりも蚤く起出て、草く屋の席をはらひ、黄菊しら菊二枝三枝小瓶に挿、囊をかたふけて酒飯を設をす。老母言ふ。「かの八曇たつ国は山陰の果にありて、ここには百里を隔つると聞けば、けふとも定めがたきに、其の来しを見ても物すとも遅からじ」。左門云ふ。「赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其の人を見てあわただしからんは思はんことの恥かし」とて、美酒を沾ひ、鮮魚を宰て厨に備ふ。という描写がある。左門は赤穴が信義のある武士であるから、必ず約束を破ることはないということを知っている。この部分も「死生交」の原文を参考した跡が見える。「死生交」は以下のように、

光阴迅速，渐近重阳。劬乃预先蓄养肥鸡一只，杜酝浊酒。是日早起，洒扫草堂，中设母座，旁列范巨卿位，遍插菊花于瓶中，焚信香于座上，呼弟宰鸡炊饭，以待巨卿。母曰：“山阳至此，迢递千里，恐巨卿未必应期而至，待其来，杀鸡未迟。”劬曰：“巨卿，信士也，必然今日至矣，安肯误鸡黍之约？入门便见所许之物，足见我之待久。如候巨卿来而后宰之，不见我惓惓之意。”母曰：“吾儿之友，必是端士。”遂烹炮以待。

となっている。両者を対比して読めば分かるように、「菊花の約」は「死生交」を惜しみなく吸収し、翻案したものなのである。老母の発言は常識的である。これに対して、左門の「約束」に対する誠実さは常識を超えて一途である。「思わんことの恥かし」の「恥」という言葉は信義を成立させ、「まこと」の感性につながっている。

③ 赤穴は、不思議な表れ方をして約束を守るために帰ってくる。約束の日の昼は過ぎ、日も西に沈んでしまった。左門は「人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきはけふのみかは。帰り来る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべし」という老母をすかして、さきにやすませる。そのあと

もしやと戸の外に出でて見れば、銀河影きえぎえに、氷輪我のみを照らして淋しきに、軒守る犬の吠ゆる声すみわたり、浦浪の音ぞここもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉てゝ入らんとするに、たゞ見る、おぼろなる黑影の中に人ありて、風の随来るをあやしと見れば赤穴宗右衛門なり。

こうして、赤穴は現れる「たゞ見る、おぼろなる黑影の中に人ありて、風の随に来る」とは、何というすばらしい描写であろう。「黑影」は用字を「死生交」から取ったが、秋成はそれに「かげろひ」という和語をあてたところに秋成の工夫がある。赤穴の魂の出現の場面を、これほどみごとに描いている例を他に見ることはできない。しかし、原文を対照的に読んだらどうなるであろう。「死生交」は以下のように、

看见银河耿耿，玉宇澄澄，渐至三更时分，月光都没了，隐隐见黑影中一人随风而至。劬视之，乃巨卿也。

となっている。ここでは秋成は原文の翻訳にとにかく全力を尽くしている。

④ 赤穴が約束を守って帰ってきたので、躍りあがるような心持ちで、早速、酒をあたため下物を並べて出すと、赤穴は「袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを嫌放くる」というふうであった。そこで左門がいぶかると、長嘘をしつつ「吾は陽世の人にあらず、きたなき霊のかりに形を見えつるなり」といいつつ、次のように言葉をつづけるのであった。

此の約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。いにしへの人のいふ、「人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」と。此のことわりを思ひ出でて、みづから刃に伏し、今夜陰風に

乗てはるばる来り菊花の約に赴。この心をあはれみ給へ。

「死生交」は以下のように、

范式僵立不语，但以衫袖反掩其面。……但见范于影中以手缚其气而不食。……范蹙其眉，似教张退后之意。……范曰：“弟稍退后，吾当尽情诉之。吾非阳世之人，乃阴魂也。……山阳至此，千里之隔，非一日可到，若不如期，贤弟以我为何物？鸡黍之约，尚自爽信，何况大事乎？寻思无计，常闻古人有云：‘人不能行千里，魂能日行千里。’遂嘱妻子曰：‘吾死之后，且勿下葬，待吾弟张元伯至，方可入土。’嘱罢，自刎而死。魂驾阴风，特来赴鸡黍之约。

「菊花の約」に「人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」という古人の言が引かれている。これも例によって、原文「死生交」の「常闻古人有云：‘人不能行千里，魂能日行千里。’」の翻訳である。しかし、同文を用いながら、原話「死生交」と「菊花の約」の違いも、この論理のもとに自刃する主人公たちの状況の違いにおいて決定的なものがあつた。「死生交」では范式が、自刃せざるを得なかつたのは、彼が重陽の再会を忘れたわけではないにしても、商人として毎日忙しい仕事に追われ、日が経つのを忘れ、ふと気づいてみると、九月九日というその当日になってしまつていたという状況においてであつた。この場合、范式は約束を軽んじていたわけではないのである。ただ、日常の営みの多忙にかまけて、とりかえしのつかない失念が生じたのであつた。

これに比べると、「菊花の約」が物語の背景を、十五世紀の乱世時代において、赤穴が終始菊花の約を忘れることなく、再会を固く期していたにもかかわらず、尼子氏の城中に監禁されて、脱出不可能な状況において九月九日の当日を迎えたという設定は、原話と大きく違つているわけである。前者と後者を比較し、話としての異質性を理解すれば、小説的構成という視点において、そのどちらかに早急にまた簡単に軍配をあげる必要はないと思われる。原話は、それなりに日常の多忙に埋没する真面目な人にありがちな失態であり、それなりにリアリティのある設定である。

一方、秋成の設定は、何よりも人が人を信ずることのできない乱世、順逆さだまらず、虚実さだかならぬ戦国の論理にまきこまれた赤穴を設定することによって、「信義」の主題をきわめて挑発的に浮び上らせるという特徴があるだろう⁵。

5. 終わりに

中国白話小説『三言』は『雨月物語』に深い影響を与えた。「菊花の約」は中国白話小説『喻世明言』の第十六巻「范巨卿鸡黍死生交」を借用して、戦国時代を背景に、当時の武士を風刺した立派な翻案作である。原話冒頭の詞「結交行」を訳した書き出しの文の美しさは有名である。原話の范巨卿を播州加古に住む丈部左門という若い浪人学者とし、張劭を赤穴宗右衛門という出雲浪人の武士とし、時代は戦国時代に設定し、この二人の「死生の交」を書いた。白話小説を翻案するという路線であつた。秋成は和文脈を多用し、その修辞の新鮮と美が大きな効果をあげている。また、原話の設定を日本の歴史風土に置きかえた結果として話の結末部は原話とは大きく異なり、左門と赤穴の連帯が、左門の丹治に対する復讐で証明されねばならなかつたという形をとる。いずれにしても、男と男、武士同士が乱世の時代であつたからこそ、お互いの信頼と友情を至上のものとして守り抜いたこの話には、相互的に人間不信に陥つた当代につきつけた秋成の憤りが反映していよう。

要するに、秋成の「菊花の約」は主題、物語の構造、詞章撰取、言葉表現などの面において中国白話小説『喻世明言』の第十六巻「死生交」を受け容れた。「菊花の約」は中国の「死生交」を借用し、戦国時代を背景に、当時の武士を風刺した立派な翻案作品であるが、「死生交」を全

般的に摂取したわけではなく、その日本の習俗、時代の特徴に着眼して、単なる模倣でなく、独自の風格を作り出したといえる。秋成が中国白話小説の技巧を取り入れ、日本の小説に用いることによって、古典小説を刺激するような新しい気風を作り出したのであろう。

注

- ¹ 「雨月物語出典をさぐる」(『解釈と鑑賞』昭和三十二年六月号)
- ² 『雨月物語評訳』(鶴月洋 角川書店 昭和五十七年六月)
- ³ 「あさましや漫筆」(『世紀』大正十三年二月)『秋成』(日本文学研究資料叢書 有精堂)にも所収。
- ⁴ 注3と同じ。
- ⁵ 『雨月物語評解』(高田衛 有精堂 昭和56年)89頁参照。

参考文献

- 馮夢龍(1996)『三言』湖北人民出版社
李国胜(1985)『『菊花の約』の典拠』『日本学論叢VII』
今泉忠義(1950)『秋成研究資料集成第九卷雨月物語精解』技報堂
高田衛(1981)『雨月物語評解』有精堂
高田衛(1968)『上田秋成研究序説』寧楽書房
中村博保(1999)『上田秋成の研究』ぺりかん社
元田與市(1993)『雨月物語の探求』翰林書房